

広島川のまちづくりを支える土木遺産の 価値構造に関する研究

田中 尚人¹・中村 康祐²

¹正会員 熊本大学准教授 政策創造研究教育センター（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）
E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

²学生員 熊本大学大学院自然科学研究科（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）
E-mail: 132d8822@st.kumamoto-u.ac.jp

土木デザインの嚆矢と言われる太田川基町環境護岸の調査・計画・設計から30年経った今日、広島の水辺ではオープンカフェや様々なレクリエーション、雁木タクシーなど市民と行政との協働により「水辺を使う文化」が醸成され、豊かな川まちづくりが展開されている。本研究では、広島太田川下流部にて展開されてきた川まちづくりを支える雁木群や河岸緑地、基町環境護岸の価値構造について考察する。本稿では基町環境護岸について詳細に分析し、太田川左岸空鞆橋上流部の「座のデザイン」を支える「体験を係留する土木史」、同空鞆橋～相生橋区間の「環境デザイン」を支える「文化を係留する土木史」の二種類の土木史の認識が、作り手と使い手、様々なステークホルダー間で共有されていることが理解された。

Key Words : history of civil engineering, Hiroshima, outstanding value, participation and waterfront

1. 研究の背景と目的

広島の水辺は、近世以前より都市の水辺として人々に親しまれ、その象徴として、現在でも400基を超えるとされる雁木（がなぎ：階段状の低水護岸）の存在がある。この雁木の一部は「京橋川の雁木群」として、2007年度の選奨土木遺産にも選定されている。

戦後、この「水の都」広島のまちづくりにおいて、河岸緑地が果たしてきた役割は大きい。この広島の水辺については、今から30年前²⁾に当時東京工業大学に所属していた助教授中村良夫氏（現：東京工業大学名誉教授）や大学院生北村眞一氏（現：山梨大学大学院教授）ら中村研究室のメンバーが建設省太田川河川工事事務所と協働し、護岸や水制工、高水敷の遊歩道などの調査・計画・設計に携わった太田川基町環境護岸が、土木分野における本格的な水辺デザインの嚆矢として名高い。また、太田川基町環境護岸は「土木学会景観デザイン賞2003」特別賞を受賞している。

太田川基町環境護岸の完成から30年経った今、広島の水辺ではオープンカフェや様々なレクリエーションが催され、雁木タクシーと呼ばれる水上タクシーが運営されるなど、市民と行政との協働により「水辺を使う文化」が醸成され、様々な川まちづくりが展開されている。中でも、空鞆橋上流の水辺に残されたポプラの木を巡る物語は、風景の作り手と使い手をつなぐまちづくりの事

例として注目に値する。2004年（平成16）台風18号により倒壊した初代ポプラは、「ポップラ・ペアレンツ・クラブ」などの活躍により、現在ひこばえが「三代目」として植樹され、周囲の高水敷では市民団体などが主催する屋外の映画鑑賞や結婚式、交流の場としての市場などが開催され、まさに市民の憩いの場となっている。

本研究では、広島太田川下流部にて展開されている「川まちづくり」を支える雁木群や河岸緑地、基町環境護岸など土木遺産の価値構造について考察する。

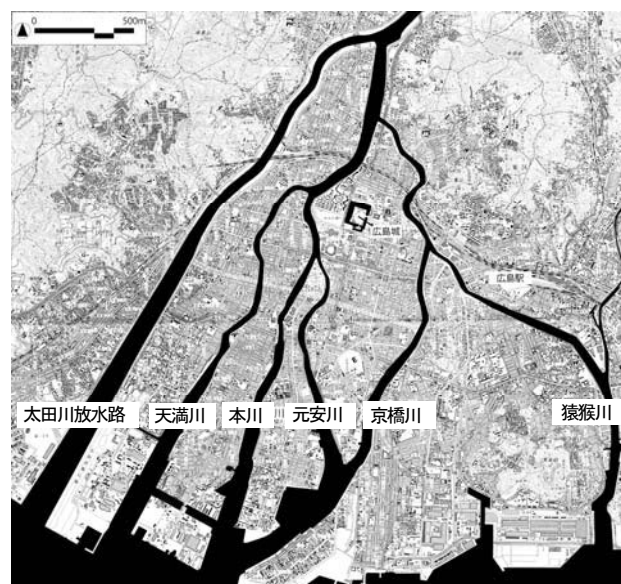


図-1 太田川下流部のデルタ地帯

表-1 戦後の広島水辺年表（広島雁木研究会作成）

年（元号）	水辺に関する計画・出来事
1945 昭和20年	【第二次世界大戦終戦】
1946 昭和21年	復興都市計画公園・緑地・墓地配置図
1949 昭和24年	平和記念都市建設法 制定
1952 昭和27年	平和記念都市建設計画・公園緑地・墓地配置計画
1967 昭和42年	河岸緑地整備四カ年計画
1976 昭和51年	東工大中村良夫研究室と太田川河川工事事務所が接触
1978 昭和53年	広島市河岸緑地整備基本計画
1983 昭和58年	基町環境護岸 完成
1989 平成元年	▼イカダ下りカワニバル
1990 平成2年	水の都整備構想 策定
1991 平成3年	元安川橋詰親水テラス 竣工
1994 平成6年	アジア大会「一館一園運動」
1995 平成7年	▼太田川の自然と水を考える集い 【阪神・淡路大震災】
1997 平成9年	▼カフェテラス倶楽部 活動開始
1999 平成11年	▽元安川オープンカフェ社会実験 水辺の公開空地第一号：JALシティホテル ▼河岸の清掃活動
2000 平成12年	▼太田川の水辺サロン
2002 平成14年	▽水の都作戦会議（都市再生プロジェクト）
2003 平成15年	水の都ひろしま構想 策定
2004 平成16年	景観法 制定 ▽ふれあいの水辺フェスティバル ▼NPO雁木組設立 雁木タクシー運行開始
2006 平成18年	▼PPC（ポップラ・ペアレツ・クラブ）結成

2. 研究の対象と手法

(1) 研究対象地

広島市内を流れる太田川の下流部は、図-1に示す通り太田川放水路、天満川、本川、元安川、京橋川、猿猴川の6本の派川に分かれて流れるデルタ地帯を形成している。広島市街地に占める、水面の面積比率が13%あり、瀬戸内海の干満によって水位が最大約3m変わり、干潮時は干潟にな感潮河川である。

(2) 研究手法

筆者らは、初代ポプラが倒木した2004年（平成16）から断続的に広島の水辺を訪れ、広島の川まちづくりに関わる市民の方々と交流し、2010年（平成22）より本格的にアクションリサーチ的な研究活動を開始した。

筆者らは、まず、既往研究や市史などの参考文献を整理し、過去の行政資料や都市計画図、工事用図面などの歴史的資料の分析など、土木史研究のアプローチを行った。また同時に、実際に市民活動を実践しておられる当事者の方々にヒアリング調査を行った。

この間、筆者らは専門知識を提供するとともに、広島の川まちづくりの多くを学び、実際に活動にも参加した。これらを、グループダイナミックスの手法を用いて、「活動の主体」「活動の目的」「活動の集合体」を整理し、広島の水辺で展開されてきた川まちづくりの大きな流れを読み取った。その流れは、内から外へ向けたもの

であり、まず清掃活動など地域住民自身のための活動から始まり、徐々に外へ向けた観光客や外部の人との協働の事業へ、水辺をともに楽しむ事業へと展開していた。

平成24年度からは、科学研究費助成事業を取得し、上記の研究活動とともにしていた市民活動のメンバーと「広島雁木研究会」を設立し、大凡二ヶ月に一回の研究会を開催してきた。研究会では、水辺に関する歴史資料を分析し、関連する活動の調査を行った結果を、表-1の年表にまとめた。さらに、太田川基町環境護岸設計に深く携わった北村眞一氏から、基町環境護岸に関する資料の整理を委託され、目録を作成するなどした。

3. 川まちづくり活動の概要

(1) カフェテラス倶楽部³⁾

「先ず自分たちでやってみる、動きながら考える」をモットーに、1995年（平成7）6月に結成して以来、月に一度以上は広島のどこかでカフェテラスを開催してきた。「賑やかで、ほっとする、広島の新しい風景を創りたい」と、基町POP'La（ポップラ）通りや平和大通り、平和公園親水テラスなどで、椅子やテーブルを自由に配置し、風景に馴染む空間を演出し続けてきた¹⁾。



写真-1 水辺のカフェテラス



写真-2 元安川のカフェ



写真-3 雁木タクシー



写真-4 雁木クリスマス

(2) NPO雁木組（NPO法人理事長：氏原睦子氏）⁴⁾

雁木とは、護岸に施された階段のこと。『雁木組』は、この雁木に街の暮らしと自然とのしなやかな関係を見出し、雁木を現代の生活に活かそうという目的で発足された。川の水上タクシー『雁木タクシー』の運行事業を通じて、広島の川と街の暮らしを豊かにすることを目指す。

(3) ポップラ・ペアレツ・クラブ（代表幹事：隆杉純子氏）⁵⁾

2004年（平成16）9月7日の台風18号で倒れたポップラ（ポプラの愛称）の再生への取り組み（写真-5）をベースに、毎月第4土曜日に基町POP'La通りの草刈り（写

真-6) や清掃活動を行っている有志団体である。樹高26mの空からヒロシマの復興を見続けてきたポプラは、倒木後2008年11月1日に切り株ベンチに姿を変え、2011年2月26日に土に帰り2世へと世代交代した。しかし2世も、病気にかかり枯れ、初代ポップラのひこばえのひこばえであるポップラ3世が2014年3月に同地に植えられた。



写真-5 2004年のイベント



写真-6 大切な草刈り活動

4. 土木遺産の価値構造に関する分析

雁木、河岸緑地、太田川基町環境護岸など川まちづくりを支える土木遺産のうち、ここでは太田川基町環境護岸を取り上げ、その価値構造について分析した。

(1) 太田川基町環境護岸空鞆橋上流部



写真-7 基町環境護岸空鞆橋上流部

a) 空間の成り立ち

この水辺は、太田川から天満川が分流する辺りから空鞆橋までの区間で、川の瀬に当たる。基町の高層住宅や中央公園に隣接し、緩傾斜から徐々に平らに変化する伸びやかな芝生の高水敷が広がっている。低水護岸は、玉石張りでのり肩から丸みを帯びた形式となっており、新しい雁木が2基築造されている。

中村良夫氏は、基町環境護岸計画時に同地にたくさん植わっていた樹木のうちから、何本かを残すように提案した。水辺の曖昧性を表現するため、日本伝統の造園技術である「投枝の松」などを例示して、水辺の樹木の必要性を中村氏が説明したが、30年前には護岸に樹木を植えることはよしとされず、建設省（当時）との折衝

は困難を極めたが、結果としてポプラとニセアカシアの二本の樹木が残された。特に背の高いポプラは河畔によく映え、周辺地域住民の原風景のシンボルとなった。2004年（平成16）1月に、市民からの公募によって広島市内の3本の道（川通り）に名前がつけられたが、そのうちの一本が『基町POP'La通り』である。

b) 空間の使われ方

当区間には芝生の高水敷が広がり、緩傾斜地を利用して、たくさんの取り組みやイベントが開催されてきた。

印象深いのは、『夕風の街 桜の国』（原作漫画：こうの史代、映画監督：佐々部清）の映画野外上映会である。本作品では、作家の原風景として当区間のポプラが描かれており、ロケも同区間にて行われた。この上映会以来、同区間での夏の野外上映会が恒例の行事となっている。また同様に、近年同区間での映画ロケなどが増えており、広島フィルム・コミッションが広島を舞台とした映画、ドラマなどのロケーション撮影を応援している。これは、該当区間の風景の訴求力がもたらしたまちづくりと言えよう。

近年、若者を中心とした市民団体やNPOも同区間で「アースデイひろしま」、「green grand market (ggm: 写真-9)」、「もとまち自由広場」、「ひろしま青空美術館 Tシャツ・アート」などの新しい取り組みやイベントを開催している。PPCと雁木組が連動した企画では、同地区で挙げた結婚式にて新郎新婦が雁木タクシーで旅立つという趣向（写真-7参照）もあった。これらは、水辺の機能的な多様性がもたらしたまちづくりである。



写真-8 ggmの風景



写真-9 ロケ地にも

c) デザイン思想とその歴史性

当区間の焦点は、やはり人々に親しまれてきた水辺のポプラであろう。風景の作り手達が、のびやかな高水敷に点景として置いたポプラ、その役割は使い手たる地元の地域住民たちにも伝わり、新しい広島の水辺のアイコンとなった。さらに、使い手たちのイメージは膨らみ、またポプラが倒れたことにより、なくなって初めて分かった豊かさや、初代ポップラの子孫たちにも想いを馳せるようになり、当区間の利用の可能性は大いに広がった。

このような使い手たちの、ポップラを焦点としながらも自由な空間の使い方を、中村氏は、読み手が次々と歌を繋げて詠む「連歌」に例えて「私たちは発句を詠んだに過ぎない。これは日本独特の『座のデザイン』であ

る」と評した。景観デザイナーが置いたポップラというアイコンに、使い手たる市民が生活文化の観点から意味を与え、当該区間の場所性をさらに豊かに色づけた、そんな参加のデザインが、この場所の風景からは読み取れる。

ここでは、竣工から30年という基町環境護岸の比較的小さい歴史の中で、「作り手×使い手」の協働がなされ、「体験を係留する土木史」が場を形成してきたと言える。

(2) 太田川基町環境護岸空鞆橋～相生橋区間



写真-10 基町環境護岸空鞆橋～相生橋区間

a) 空間の成り立ち

この水辺は、太田川の空鞆橋から下流の相生橋までの区間で、川の淵に当たる。水衝部となり、低水護岸は上流部と同様に川石の玉石張りで丸みを持たせた練り石積み、高水敷は表面をはつた花崗岩の空石積み、高水護岸は練り石積みとなり、全体的には「堅い」イメージの空間となっている。高水敷の上、堤防天端には空地があり、WSなどでは中村氏は「ここには、オープンカフェなんかがあるといいと思っていたんだよ」と語っている。

ここに「出し」と呼ばれる水制工が4基築造されている。当区間には、基町環境護岸計画時ケレップ水制のような水制工があったことが確認されており、中村氏は「人が川に近づける、（実際には行けなくても）水際に近づきやすく見せる」という親水象徴の理論を援用し、二種類の「出し」をそれぞれ2基設計した。

b) 空間の使われ方

当区間では、高水敷にあるテラス風の場所や芝生の部分で小人数が憩う様子が見られる。それ以外で特徴的な活動としては、「出し」で戯れる子供たちや釣り人などのアクティビティが見られる。

北村眞一氏は、設計当時のことを振り返り「当地区で配慮したのは、「広島らしさ」つまり瀬戸内地方の花崗岩の文化と「川らしさ」の二つであったと説明している。玉石の配置の仕方や、低水護岸と高水敷の切れ目、高水敷の路面のはつり、など水辺における人々のアクティビ

ティを分析し、それぞれのディテールに合わせて素材感を決定したという。北村氏がWSにて、当区間の高水敷について「ごつごつして歩きにくいんです。でも、水辺って歩きにくい方がそれらしいのです」と説明されたことが興味深い。

c) デザイン思想とその歴史性

当区間では「出し」に象徴されるように、河川の流れや感潮河川という特性に抗して公共空間をつくるという環境デザイン的な設計思想が読み取れる。花崗岩という素材にこだわって、空積みや多孔質な生態系に優しい水辺環境を構築することで、「人工美×自然美」の多様性が生まれ、水辺の持つ曖昧性が獲得されている。

ここでは、太田川放水路までも視野に入れた、太田川デルタ全体の自然環境の中で、人々の生活環境を確保してきた比較的小さい歴史、水の都の「文化を係留する土木史」が場の成立に関わっていると言える。

5. まちづくりを支える土木遺産の価値

広島の川まちづくりを支える土木遺産のうち、今回は太田川基町環境護岸について詳細に分析した。太田川左岸空鞆橋上流部の「座のデザイン」を支える「体験を係留する土木史」、空鞆橋～相生橋区間の「環境デザイン」を支える「文化を係留する土木史」の二種類の土木史の認識が、作り手と使い手、市民・行政・専門家などのステークホルダー間で共有されていることが理解された。まちづくりの基盤となる土木遺産の価値構造を「二種類の土木史」として読み解いた。

謝辞：本研究は、多くの方々のご協力の下で成り立っている。二人三脚で本研究を立ち上げた熊本大学大学院自然科学研究科博士後期課程（当時）岩田圭佑氏、ともに研究活動に勤しんだ馬場啓維氏、穴井美紗氏の名を共同研究者として記す。広島市都市整備局局長西岡誠治氏をはじめ職員の皆様、国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所植田彰氏をはじめ職員の皆様、広島雁木研究会のメンバー、広島市民の皆様など、記して感謝の意を表します。そして、広島の水辺を長く見守ってこられた山崎学氏に御礼の言葉を述べて筆を置きます。

参考文献

- 1) 中村良夫：風景を創る～環境美学への道、NHK出版、2004.6
- 2) 松浦茂樹：投稿 話の広場 河川環境デザインの出発点、土木学会誌、Vol. 84, No12. 1999
- 3) カフェテラス倶楽部のHP
(http://www.chaus.or.jp/cafe/The_kafeterataimusub/biao_zhi.html)
- 4) 雁木組のHP (<http://www.gangi.jp>)
- 5) P P CのHP (<http://poplaparentsclub.web.fc2.com/>)

(2014.4.7 受付)